

〔駒沢女子大学 研究紀要 第二四号 p 一〇一九・二〇一七〕

「平安義会沿革概略」の翻刻と官家士族の先行研究

― 『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介（一） ―

下 川 雅 弘*

Introduction to Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) for the Study of Kyoto-kanke-shizoku (I)

Masahiro SHIMOKAWA*

Abstract

The term Kyoto-kanke-shizoku refers to the low-level functionaries who served in the Imperial Court until 1869. They became unemployed and impoverished as a result of the Meiji Restoration. The organizations Heian-gikai and Kyoto-Ohkitsu-zaidan were founded to support them. Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) are the materials handed down from generation to generation in these organizations. In 2016, these materials were donated to the Kyoto Institute, Library and Archives. This text was written to introduce them for being used in the study on the Kyoto-kanke-shizoku.

* 人文学部 日本文化学科

はじめに

官家士族とは、明治二年（一八六九）七月の百官の廃止以前に、朝廷へ出仕していた主に京都在住の者のうち、後に華族のような特権を付与されず、多くが士族に編入された諸官人・仕人や官家・公卿・社家・門跡寺院の家士などで、近世までの公家社会における地下官人とこれに連なるさまざまな人びとである。彼らのほとんどは、明治新政府に登用されることなく失職したため、明治維新以後におけるその生活は、困窮の一途を辿っていた。

こうした官家士族の救済等を目的として、明治二十四年（一八九二）五月に平安義会、明治四十二年（一九〇九）十二月に京都桜橋財団が組織された。両団体の詳細については本論で適宜紹介していくが、平安義会は現在も会員相互の連携と親睦を目的とする一般財団法人恩賜財団平安義会として活動しており、また、京都桜橋財団は公益法人制度が抜本的に見直された平成二十年（二〇〇八）の前後頃までに事実上解散している。

さて、平成二十八年（二〇一六）、京都府立総合資料館（現、京都府立京都学・歴史館）に『平安義会資料』および『旧桜橋財団関係資料』が寄贈された。『平安義会資料』は、平安義会が保存してきた明治十六年（一八八三）から昭和四十七年（一九七二）までの一二六点、『旧桜橋財団関係資料』は、かつて京都桜橋財団で保存されていた明治四十二年から昭和四十二年（一九六七）までの二五五点の史料である。^①

本稿は副題を「『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介（一）」

としたとおり、以後数回にわたって、これらの史料を翻刻・紹介することを主な目的としている。あわせて官家士族たちが近代以降の社会をどのように生き抜き、また、そのために両団体が物質的かつ精神的な側面でのどのような役割を果たしたのかを明らかにするとともに、彼らが明治維新以後の急激な社会変革をいかに受け止めていったのかについても考察したい。ただし、本来ならばこれらの史料をすべて翻刻・紹介すべきところであるが、相当な分量に及ぶ会員名簿や諸書類・帳簿などの中には、閲覧制限のあるものも多く含まれているため、先に掲げた課題を追究するために有益な史料に限って翻刻・紹介すること、あらかじめお断りしておく。

なお、一回目となる本稿のみの内容と目的であるが、まず官家士族の先行研究の中で、平安義会および京都桜橋財団について、すでに明らかにされている事実を整理する。つぎに先行研究が依拠した史料である『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』および『平安義会事歴』を再検討するとともに、『平安義会資料』所収の「平安義会沿革概略」と題された史料を翻刻し、両団体についてこれまで言及されてこなかった事実や、「平安義会沿革概略」の史料的性格などを紹介していきたい。

一 官家士族の先行研究と平安義会・京都桜橋財団

（一）小林丈広氏の研究成果

小林丈広氏は、著書『明治維新と京都―公家社会の解体―』^②の中で、明治二年（一八六九）の百官の廃止から、明治二十四年（一八九二）

の平安義会の結成に至る官家士族の動向について詳述しており、同書は官家士族および平安義会に関するもつとも重要な先行研究である。

根拠となる史料としては、平安義会の二代目会長である尾崎三良の『尾崎三良日記』³と、彼の後年に記された『尾崎三良自叙略伝』⁴を中心に、たとえば『若杉家文書』⁵をはじめとする官家士族の家に伝えられた文書なども駆使している。以下、小林氏の研究成果に基づき、平安義会設立の経緯について整理・紹介していく。

京都の公家社会末端の出身で、新政府に出仕していた伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監の三名が、東京在住の官家士族のリーダーとして、明治十二年（一八七九）五月、三条実美と岩倉具視に対し、京都在住の官家士族の救済を働きかけた。六月には、京都の官家士族三八名も、三条実美に宛てた位記回復の請願書を作成している。七月に明治天皇の内帑金から三万円の恩貸金下付が認められると、尾崎らは京都に産業誘導社を開業し、生活に困窮している官家士族への授産事業を始めたのである。また、手元に公債を保有していた官家士族に対しては、十二月に京都第百五十三国立銀行を設立し、銀行を通じた投資とその配当や利子によって、彼らの生活の維持を図ろうとした。ただし、同行は明治十九年（一八八六）の京都第百十一国立銀行との合併を経て、明治三十一年（一八九八）一月に放漫経営により廃業している。

ところで、産業誘導社についても、当初は三万円の恩貸金の利子のみにより運営する方針であったが、やがて原資に手を付けるようになるとともに、経営不振に陥っていった。明治十五年（一八八二）三月、危機感を抱いた伊丹や尾崎らは、産業誘導社の閉鎖と官家士族のため

の学校設立を三条・岩倉に宛て請願する。そして、明治十六年（一八八三）十月、恩貸金の残金二万円とあらたに下賜された恩賜金によって、平安義校が創設されることとなり、産業誘導社は廃止されたのである。

なお、同明治十六年一月に岩倉具視が京都皇宮保存の意見書をまとめるものの、七月に死去してしまう。同年十月には岩倉の遺志を受けて宮内省京都支庁が開設され、職員には官家士族たちが多く採用されている。開庁の目的の一つは彼らの救済にあったが、明治十九年（一八八六）二月には京都出張所に縮小改組され、職員も大幅に減員となったため、官家士族の救済事業としての側面は失われていった。

さて、明治十七年（一八八四）はじめには開校した平安義校であるが、教育内容は漢学や武術などを中心とする復古的なもので、欧化主義全盛期にあつては実用性に乏しく、やがて行き詰まっていく。こうした中で恩賜金の使途をめぐり、官家士族内で意見の対立が深刻化する。平安義校の維持・管理を委嘱されていた京都府知事の北垣国道や平安義校幹事の中川武俊らが、恩賜金による官家士族の子弟への奨学金貸与を提唱したのに対して、平安義校創立委員の多村知興や京都第百十一国立銀行の開業者の一人である畑道名らは、恩賜金を京都在住の官家士族の共有金とすることを主張したのである。

結局、伊丹・尾崎といった発起人らの斡旋により、明治二十四年（一八九一）五月、京都在住官家士族の救済と懇親を目的とする団体として、あらたに平安義会が結成され、両者の対立の解消が図られた。こうして組織された平安義会について、小林氏は「(対象を)官家士

族に限定した閉鎖的なもので（中略）、官家士族の運動は、安定すると同時に社会性を失い、現実には限られた影響力しか持たなくなっていた」と結論づけている。

（二）山下奈津美氏の研究成果

平安義会を扱った専論として、山下奈津美氏の「平安義会のあゆみ―二條家と同志社をつなぐもの―」^⑥がある。ただし、同志社大学歴史資料館の館報に掲載された同論文は、副題が示すとおり、二條家と同志社をつなぐ存在として、平安義会に注目したものである。

五撰家の一つである二條家の邸宅は、かつて京都御所北東の常磐井殿町に所在し、明治十六年（一八八三）に平安義校へ貸し下げられ、後に平安義会の所有となった。戦後、同志社が校地として購入し、現在には同志社女子大学今出川キャンパスの一部となっている。

山下氏の論文の大半は、小林丈広氏が『明治維新と京都』の中で明らかにした平安義会のあゆみを整理・紹介したものであるが、明治十二年（一八七九）七月に開業された産業誘導社が大宮御所の建物の一部を拝領し、京都御所北西の玄武町に移築して使用していたという事実を指摘し、また、明治十六年に二條邸が平安義校に貸渡された背景を、当時二條邸を管理していた宮内卿の徳大寺実則との関係から推定するなど、小林氏が詳しく取り上げなかった産業誘導社や平安義校の建物・所在地等について補足している。

さらに、小林氏の叙述が、明治二十四年（一八九一）五月の平安義会の結成までで終わっているのに対し、山下氏は主に『平安義会事

歴^⑦に基づいて、明治十六年（一八八三）から毎年下賜されてきた恩賜金が満期となる明治二十六年（一八九三）に、平安義会初代会長の伊丹重賢が願書を提出し、同年より十年間、従来の半額の恩賜金の下賜が認められたこと、それでも平安義校の維持が困難であるため、学資貸与規則を定めて奨学事業を開始し、平安義校を閉鎖したこと、明治四十年（一九〇七）一月の調査では、規則施行以来、学資援助を受けて帝国大学・高等学校・私立専門学校等を卒業した者が五八名（在学中の者を合計すると四〇五名）に上ることなど、明治四十一年（一九〇八）までの平安義会のあゆみに言及したのである。

（三）松田敬之氏の研究成果

松田敬之氏の論文「明治・大正期 京都官家士族の動向に関する一考察―華族取立運動と復位請願運動を中心に―」^⑧は、明治期から大正期にかけて、京都官家士族たちが復位請願運動や華族取立運動を展開したもの、結果はすべて却下されたという事実を、豊富な事例と丹念な史料調査によって明らかにしている。

たとえば官家士族で『幕末の宮廷』^⑨の著者としても知られる下橋敬長以下十名が、大正四年（一九一五）に行った復位請願運動の分析では、『下橋家資料』^⑩所収の「復位請願書控」を全文意訳・掲載するとともに、下橋について「京都官家士族の親睦団体である平安義会・京都桜橋財団においては、評議員も務めていた」と紹介した。また、付記において、「本稿執筆にあたり、旧京都官家士族の親睦団体である京都桜橋財団・平安義会理事長で、宗像神社の高屋定幸宮司には、官家士

族全体の意志として、復位請願運動が行われたであろう点を御指摘頂いた」と述べている。なお、京都桜橋財団についてわずかも言及している先行研究は、管見の限り松田論文のみである。

(四) 当該研究の課題

以上のように、平安義会・京都桜橋財団と官家士族に関する研究には一定の蓄積があるものの、『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』や『平安義会事歴』など限られた史料ばかりに基づいており、また、明治末期から戦後に至る平安義会のあゆみやその活動内容に関しても、詳しい検討がほとんどなされておらず、さらに、京都桜橋財団に至っては、設立の目的やその後の展開、平安義会との関係性などについても、まったく解明されていないのである。

そこで、以後数回にわたって『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』を翻刻・紹介することにより、以上のような課題の克服を目指したいと考えている。

二 『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』および『平安義会事歴』の再検討

(一) 『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』の再検討

小林丈広氏が官家士族や平安義会の動向を明らかにするために、主な史料として使用した『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』の中から、あらためて平安義会等に関連する記事を編年で整理したのが【表1】

である。なお、出典について、『尾崎三良日記』は(日)、『尾崎三良自叙略伝』は(略)として年表中に示している。また、『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』の中に引用・掲載されている書簡・請願書等の写しの情報についても、その史料名を年表中に記した(省略された規則・規約等は太字で示している)。

では、【表1】で整理した『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』の平安義会および京都桜橋財団関連記事により、これまでの官家士族研究では触れられることのなかった事項を、以下に紹介していきたい。

明治十二年(一八七九)に恩貸された三万円について、当初は「無利息拾五ヶ年据置」「拾六ヶ年目より向拾五ヶ年賦返納」とされていたが、明治二十一年(一八八八)にはこれを恩賜金とする旨、宮内大臣土方久元より通達がなされている。また、明治二十六年(一八九三)より十年間、従来の半分に当たる年一千二百円の恩賜金が承認されていたが、明治三十年(一八九七)にこれを廃止する代わりとして、四万円が下賜されたのである。これらは平安義会の奨学事業の重要な原資となった。『尾崎三良自叙略伝』の「平安義会会長辞任更に副総裁となること」の項で、尾崎は「明治三十年に至り、宮内省より在京都官家士族子弟教育資金の爲めとして更に軍事公債四万円の下賜相成り、前に受くる所の三万円とを合して都合七万円なりしを、其管理の方法宜しきを得て、一面には多数の子弟に学資を給し其学業を爲さしめつつ、一面には此資金を増殖して益々其基礎を強固にし、官家士族の此恩恵を受くるものを益々増加し、益々永遠に広く其恩沢を蒙らしめん

【表1】

年	月日	事項	掲載史料（写し）
明治12年（1879）	4月26日	伊丹重賢・尾崎三良らが同郷人の親睦団体として、東京に平安社を設立する（日）。	
	5-6月	尾崎が伊丹・桜井能監とともに、京都官家士族の救済について、岩倉具視らに相談し、願書を提出する（日）(略)。	三条実美・岩倉宛伊丹・尾崎・桜井願書（略）
	6月28日	京都官家士族の救済について、岩倉が覚書で論旨する（略）。	岩倉覚書（略）
	7月1日	京都官家士族救済のため、御手許金3万円を恩貸される（日）。	伊丹・尾崎・桜井宛三条・岩倉御書付、伊丹・尾崎・桜井宛徳大寺実則御達（日）(略)、徳大寺宛伊丹・尾崎・桜井御請書並二伺書（日）
	7月18日	尾崎らが京都に出張する。大宮御所御台所の建物を玄武町に移築し、誘導社規則を定め、産業誘導社を開業する。当初は恩貸金3万円の利息で事業を営み、中川武俊に監督を委嘱する（日）(略)。	
	(12月)	第百五十三国立銀行を開業する（略）。	
明治14年（1881）	10月11日	尾崎が京都に出張し、産業誘導社および第百五十三国立銀行を査察する（日）。	
明治15年（1882）	1月26日	産業誘導社および京都官家士族の救済について、尾崎が伊丹・桜井と会合する（日）。	
	1月	産業誘導社中で事業展開を望む者より、京都府知事北垣国道を通じて恩貸金3万円の元本支出の要求がなされ、尾崎らがこれを認めたところ1万円を損失する。そのため残る2万円により学校を設立し、京都官家士族の子弟を教育する方針に転換する。学校設立について、伊丹・尾崎・桜井が三条・岩倉に請願書を提出する（略）。	三条・岩倉宛伊丹・尾崎・桜井請願書（略）
	5月30日	産業誘導社および第百五十三国立銀行について、尾崎が伊丹らと会合する（日）。	
	12月10日	尾崎が伊丹・桜井とともに岩倉を訪問し、産業誘導社の内情について会合する（日）。	
明治16年（1883）	8月	第百五十三国立銀行監督のため、尾崎が京都に出張する（日）。	
	9月	京都官家士族のための学校設立について、尾崎が奔走する（日）。	
	10月2日	京都官家士族のための学校設立について、15年間、年2千4百円の恩賜と、旧二条邸の拝借が内決する（日）(略)。	尾崎宛三条書簡（略）
	10月8日	宮内省より、常磐井殿町の旧二条邸貸渡と、15年間で改め10年間、年2千4百円の恩賜が通達される（略）。有栖川宮熾仁らより、京都官家士族の教育への尽力を命じられる（日）(略)。	伊丹・尾崎・桜井宛宮内省御達書（略）、伊丹・尾崎・桜井宛有栖川宮・三条御書付（日）(略)
	10月9日	平安義校設立について、尾崎が伊丹・桜井と会合する（日）。	
	10-12月	第百五十三国立銀行、旧二条邸拝借と平安義校設立、産業誘導社の閉鎖について、尾崎が奔走する（日）。山名茂淳・多村知興・中川・泉亭俊彦・東辻清光が、平安義校創立委員となる。平安義校規則を定め、産業誘導社を廃止し、玄武町の建物を平安義校へ引き渡して、校舎・講堂・演武場・寄宿舎等に充てる。平安義校の資金は、恩貸金の残り2万円で買い入れた日本鉄道会社の株式の配当金、年2千4百円の恩賜金、有栖川宮・三条・伊丹・尾崎・桜井からの寄附などを充てる。毎月平安義校の状況と学資の計算を、東京発起人に報告する義務を負う義校理事に、山名・多村・中川が就任する（略）。	平安義校規則は之を略す（略）
(明治17年(1884))	(1月)	平安義校設立の際、建校大意を官家士族一般に発布する（略）。	建校大意は之を略す（略）
	4-5月	平安義校規則修正案等について、中川が尾崎に相談する（日）。	
	11月	尾崎が三条を訪問し、平安義校のことや多村の転任などについて相談する（日）。	
明治18年（1885）	9月	尾崎が平安義校を視察する。義校および銀行の関係者と懇談する（日）(略)。	
明治19年（1886）	7月9日	尾崎らが平安義校教則等改正について、中川に書面を送る（日）。	中川宛伊丹・尾崎・桜井書簡（日）
	8月30日	平安義校の隣地買得について、中川より書面が届く（日）。	

年	月日	事項	掲載史料（写し）
	11月	尾崎が第百十一国立銀行を訪問し、辻重義・桂正芳と会合する。平安義校を視察する。銀行および義校の関係者と懇談し、義校の生徒と遠足に行く（日）(略)。 この年、第百五十三国立銀行を第百十一国立銀行に合併する（略）。	
明治20年（1887）	2月4日	去2月2日に平安義校へ有栖川宮らが視察との書面が、中川より届く（日）。	
明治21年（1888）	6月12日	京都官家士族授産の恩貸金3万円を恩賜金とする旨が、宮内大臣土方元より通達される（日）(略)。	伊丹・尾崎・桜井宛土方御達書（略）
	6月	平安義校内での中川と西尾為忠との争論について、辻より書面が届く。平安義校維持の方法について、三条の招待により、伊丹・尾崎・桜井・五辻安伸・北垣らが会合し、校長・幹事選任や校事監督を北垣に委任する（日）。	
	8-9月	平安義校維持の方法について、三条・五辻・伊丹・尾崎・桜井らが、たびたび会合および書面をやり取りする。北垣から校舎建設・授業料追加徴収案について、報告書が届く。尾崎は義校を廃止し、官家士族の選抜者に学資を補助すること、および恩賜金の取り扱い方を厳しくし、毎年京都の新聞紙面にこれを公告することを提案する（日）。	
	12月31日	教育費基金現在所有高を調査する（略）。	教育費基金現在所有高の内訳は之を略す（略）
明治22年（1889）	1-6月	平安義校恩賜金精算書を、伊丹より三条へ回送することを依頼する。恩賜金について、京都の山科生幹・畑道名らより質問状が届き、返書を桜井に依頼する。恩賜金の取り扱い方等について、京都府知事への委任を決定する（日）。	
	3月27日	恩賜金取り扱いについて、規約を定め、現現金高を示し、京都の新聞紙面で官家士族に報告する旨、伊丹・尾崎・桜井が土方に上申する。恩賜金取り扱いについて、官家士族に報告し、恩賜金精算明細書は平安義校にて閲覧可能とする（略）。	土方宛伊丹・尾崎・桜井上申書、在京都旧官家士族諸君へ伊丹・尾崎・桜井より報告、在京都旧官家士族教育基金取扱規約は之を略す（略）
明治23年（1890）	3月7日	平安義校について、三条・尾崎・桜井が会合する。五辻は義校廃止を提案しているという（日）。	
	5月	伊丹・尾崎・桜井らが、岩倉公墓参のため上京した平安義校の生徒・教員らと懇親する。平安義校について、三条・五辻・北垣・伊丹・尾崎・桜井らが会合する。多村・山科・畑らは恩賜金を京都官家士族の共有物と主張しているという。恩賜金の管理は伊丹・尾崎・桜井、監督は三条・五辻に委任されていることを確認する。北垣は平安義校の委任について、個人としては受けられないと返答する（日）。	
明治24年（1891）	4月	平安義校維持法改正について、尾崎・桜井が書面をやり取りする。平安義校基金を京都官家士族へ引き渡す方法について、五辻・伊丹・尾崎・桜井らが会合し、五辻に委任することを決定する（日）。	
	6月	京都の辻・中川・多村・山科・畑らより、平安義校設立の要旨等について書面が届き、尾崎・伊丹・桜井より賛同する旨を返信する（日）。	
	9月	平安義校抄紙場について、伊丹・尾崎・桜井が書面をやり取りする。平安義校基金の管理方法について、五辻・伊丹・尾崎・桜井らが会合する（日）。	
明治25年（1892）	1月	中川ら19名が発起人となり平安義会代議員選挙を実施したことについて、旧官家士族同志者総代らが不服の旨の書面を尾崎に届ける（日）。	
	7月	尾崎が京都に出張する。辻・中川・多村らと会合し、平安義校を見学する（日）。	
	9-10月	平安義校のことについて、伊丹・尾崎・桜井が会合する。また、基金について書面をやり取りする（日）。	
明治26年（1893）	3-5月	平安義校の将来について、尾崎が伊丹・桜井と会合し、恩賜金の継続を有栖川宮に相談する（日）。	
	3月	年2千4百円の恩賜金について、土方に継続願を提出する（日）(略)。結果として、10年間、従来の半額となる年1千2百円の恩賜金が承認される（略）。	土方宛伊丹・尾崎・桜井願書（略）

年	月日	事項	掲載史料（写し）
明治26-29年 (1893-96)	5月18日	平安義会の総代として、鳥居川憲昭・服部保親が、官家士族の区域を定めること、伊丹・尾崎・桜井のいずれかを会長に推戴すること、平安義校理事を公選にすることを要求する（日）。	伊丹宛宮内省御達書（略）
	5月25日	尾崎が京都に出張する。平安義校を見学し、平安義会総代議員と懇談する（日）。	
	7月	伊丹が平安義会会長に推薦される（日）(略)。	
	7-10月	伊丹、畑ら立ち会ひのもと、平安義校基金を引き渡す（日）。	
	9月13日	10年間、年1千2百円の恩賜金について、宮内省より通達される（略）。	
明治26-29年 (1893-96)		不十分な教員を雇わざるを得なくなったことに加え、恩賜金が半額となったことで平安義校の維持が困難となる。平安義校を廃止し、恩賜金により官家士族子弟のうち優秀で資力のない者に学資を貸与する方針が、平安義会の総会で承認され、官家士族子弟資金貸与規則を定める（略）。	官家士族学資貸与規則は之を略す
明治30年（1897）	1月	平安義校への年1千2百円の恩賜金を廃止する代わりとして、皇室資産より4万円が下賜される。以来、京都在住官家士族の子弟で高等学校以上に入学する者に、学資の全部または一部を貸与することとなる（略）。	
明治32年（1899）	10月18日	第百十一国立銀行が支払停止となり、大蔵省の調査の結果、辻らが刑事被告となる（略）。	
明治32年（1899）	10月18日	尾崎が三条実万四十年祭のため京都に出張する。中川・畑・服部ら官家士族との懇親会に参加する（略）。	
明治33年（1900）	7-8月	伊丹の死去により、平安義会評議委員会の全会一致をもって、尾崎が会長となる。平安義会の所有財産を引き継ぐ（日）(略)。	
明治34年（1901）	10月19日	官家士族宮内省請願について、服部が相談に来る（日）。	会長訓辞（略）
	12月12日	平安義会の法人化について、定款案および貸給規則改正案等が届く（日）。	
	12月16日	官家士族のことについて、畑・水口卓哉が相談に来る（日）。	
	4月	旧官家士族惣代畑・水口らが、官家士族名簿および参考書等を持参する。田中光顕宮内大臣に旧官家士族名簿と官家士族救恤金下賜に関する請願書を提出する（日）(略)。	
	5月6日	尾崎が宮内省を訪問し、平安義会よりの皇孫降誕賀表と、明治33年度恩賜金精算書および財産目録等を提出する（日）。	
明治35年（1902）	5月10-14日	尾崎が京都に出張し、平安義会幹事・評議員や多村・水口・岩橋元柔・畑らと会合する。平安義会教育恩賜金補助学生等の宣誓式に出席する。官家士族の懇親会に出席する（日）(略)。	
	3月29日	尾崎が服部・水口・畑とともに小松宮邸を訪問し、官家士族の請願について相談する（日）。	
	12月8日	尾崎が神輿知常に京都官家士族の恩典請願について相談する（日）。	
明治36年（1903）	9月14日	尾崎が伊藤博文を訪問し、官家士族恩典のことを相談する（日）。	
(明治40年(1907))	10月18日	尾崎が京都に出張し、平安義会学生宣誓式に出席する（日）(略)。	
		官家士族救恤金下賜に関する請願書に対して、20万円の下賜がなされる（略）。	
明治42年（1909）	6月	内務省・文部省に申請し、平安義会が社団法人として承認される（略）。	
明治43年（1910）	(12月)	水口・畑・岩橋・服部保親らが、官家士族の困窮者を救済するため、皇室より下賜された20万円を基金として、桜橘団を設立する（略）。	
	9月	貸渡されてきた常磐井殿町の旧二条邸地について、低価払い下げの願書を宮内省に提出する（略）。	
明治44年（1911）	3月	旧二条邸地の払い下げが決定し、平安義会の私有となる（略）。	
	5月	尾崎が平安義会会長を辞任し、定款を改正して副総裁となる（略）。	
	8月27日	平安義会会長服部より尾崎に感謝状と記念品の目録が贈られるが、尾崎は記念品を固辞する（略）。	尾崎宛服部感謝状（略）
	9月17日	尾崎が感謝状に対する答礼書を送る（略）。	平安義会理事宛尾崎答礼書（略）

と計画せしに、其尽力の効空しからず、大正六年に至り、資金は七万円より増加して既に三十万円近くと為る」と述懐している。

さて、平安義校のあり方や恩賜金の使途をめぐることは、官家士族の内部で「旧態依然たる運営を脱しようとする北垣・中川の意向と、京都在住官家士族の独自性を守ろうとする多村・畑らとの対立」があったことなどを、小林氏がすでに指摘しているが、【表1】のとおり、『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』にはこうした対立について、かなり詳細な記述が残されている。

明治二十一年（一八八八）頃から、平安義校を維持する方法について、東京の尾崎・伊丹重賢・桜井能監らはたびたび協議しているが、尾崎はすでにこの年の時点で、義校を廃止し奨学事業に転向すべきことや、恩賜金の取り扱い方を厳しくすることを構想していた。その後尾崎らは、多村知興・畑道名・山科生幹・服部保親といった京都在住官家士族の意向をくみ取りつつ、明治二十四年（一八九一）、平安義校設立要旨に賛同し、明治二十六年（一八九三）の伊丹の同会会長就任に至るのである。

明治三十三年（一九〇〇）に尾崎が会長を引き継ぐと、多村・畑・服部・水口卓哉・岩橋元柔らが、さらに広範な官家士族への救済を求めて、たびたび尾崎を頼っている。実際に尾崎の後ろ盾もあって、明治三十四年（一九〇一）には、田中光顕宮内大臣宛に官家士族への救恤金下賜に関する請願書が提出されており、明治四十年（一九〇七）には二十万円が下賜されている。その後、明治四十二年（一九〇九）には、この二十万円を基金に、官家士族の困窮者を救済するための新

たな組織として、京都桜橋財団が設立されるのである。

ただし、この新団体について、尾崎は『尾崎三良自叙略伝』の「桜橋団のこと」の項で、「此外、官家士族の爲めに設立せし桜橋団なるものあり。是は官家士族の困窮せしものを賑恤する爲めに帝室より下賜なりたる二十万円を基本として設立せしものにして、広く官家士族全般に及びしものなり。前の平安義会とは其性質を異にせり。義会の方は初めの御沙汰書に明記せし通り、官家士族にして現に京都に居住せしものに限りたるものなれば、其間自ら判然と区別あり相混すべからず。桜橋団の事は水口卓哉、畑道名、岩橋元柔、服部保親外数名、多年東西に奔走し其筋へ請願し、予も亦始終其間に在つて斡旋し、十数年の後渡辺宮内大臣の時、漸く此結果を得たるのみ。此事件に付き数年の間種々の変遷波瀾ありしも、後年に属することなれば爰には其端緒のみを記して詳細を省くこととせり」との証言を残している。

ところで、尾崎は明治三十三年の会長就任以来、少なくとも明治三十四年と明治三十六年（一九〇三）の二回、京都に出張して平安義会教育恩賜金補助学生の宣誓式に出席している。また、尾崎は平安義会の社団法人化に尽力しており、明治四十二年にこれを達成するのである。なお、この年には先述した京都桜橋財団も設立されており、明治四十二年は官家士族の救済事業にとつての画期と捉えられる。さらに、明治四十四年（一九一一）に旧二条邸地の払い下げを成し遂げた上で、尾崎は会長を辞任しており、先述した資金の増殖をはじめ、彼が平安義会の資産確立に果たした役割は、たしかに多大であると評価できよう。

（二）『平安義会事歴』の再検討

明治四十一年（一九〇八）十一月に平安義会によって編纂・刊行された『平安義会事歴』は、先述のとおり、平安義会のあゆみを跡づける際に、山下奈津美氏が根拠の一つとした史料である。まずはその緒言を、以下に引用する。

平安義会事歴緒言

抑平安義会ハ京都官家士族ノ組織セル団体ニシテ、其目的精神ハ本義会ノ規則ニアル如ク、上 皇室ノ恩眷ト下祖先ノ勤勞トヲ感銘シ、会員子弟ノ學芸ヲ奨励シ、国家有用ノ材ヲ養成セントスルニ在ルコトハ、会員一同ノ熟知スル処ナレトモ、年所ヲ経ルニ随ヒ老年者逐年黄泉ト為リ、少壯ノ会員中或ハ本義会ノ濫觴事歴ヲ知悉セス、遂ニハ優渥ナル

朝恩ヲ忘却シ、祖先ノ勤勞由緒ヲモ抛擲シ、遂ニハ本義会ノ成立精神ヲモ滅却スルニ至ランコトヲ恐ル、宜ク今ニ迫ンテ本義会の濫觴事歴ノ梗概ヲ収録シ、以テ後昆ニ伝ヘ永ク朝恩ノ深厚ナルヲ諷セス、益々祖先ノ功勞ヲ顕揚センコトヲ思ハシムヘシ頃口、会員中ノ年長者数人相会シ談偶々此事ニ及フ、皆同感ナリ、依テ其希望ニ從ヒ旧書類ニ就キ其梗概ヲ編纂シ、専ラ会員ノ記憶ニ便セント欲ス、惟憾クハ事数十年前ノ久シキニ亘リ、書類散佚シ、事歴ノ粗密斷統一ナラス、或ハ誤脱アランコトヲ、冀クハ識者其誤脱ヲ補正スル処アラハ幸甚、

明治四十一年十一月

編者識

この緒言では、平安義会の事歴と朝恩を会員に周知するとともに、これを将来にわたって伝えていくため、年長の会員数名の発起により、旧書類に基づいて『平安義会事歴』の編纂がなされたと説明されている。ただし、その編纂に携わった人名については、どこにも記載がないのである。

さて、『平安義会事歴』の本文に記されている事項と、引用・掲載されている書簡・請願書や規則・規約・目録等の写しの情報を簡潔に整理したのが【表2】である。なお、規則・規約・目録等は太字で示し、また、『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』にも引用・掲載されている書簡・請願書等の写しには下線を施している。

【表2】で整理した『平安義会事歴』に引用・掲載されている書簡・請願書などに注目すると、特に平安義会にとって重要な史料については、『尾崎三良日記』や『尾崎三良自叙略伝』に引用・掲載されているものとはほぼ共通しているのである。これは『平安義会事歴』が、尾崎の手元に残された書簡・請願書などの旧書類に基づいて編纂されたことを物語っている。

それと同時に、たとえば明治十六年（一八八三）の産業誘導社廃止から平安義校設立に至る記事や、明治二十六年（一八九三）の学資貸与規則制定から平安義校廃止に至る記事などで顕著にみられるとおり、『尾崎三良自叙略伝』には、尾崎が後年、『平安義会事歴』の叙述をそ

【表2】

年	月日	事項	掲載史料（写し）
明治12年（1879）	5月	京都官家士族の救済について、伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監が三条実美・岩倉具視に相談し、願書を提出する。	三条・岩倉宛伊丹・尾崎・桜井願書
	6月28日	岩倉が覚書で論旨する。	岩倉覚書
	7月1日	伊丹・尾崎・桜井が宮内省に召され、御達書を拝領する。三万円は恩貸であるが、初めから下賜とすれば気がゆるむことを懸念して、十五年後に元金返上の義務を付したと、三条・岩倉より訓戒される。	伊丹・尾崎・桜井宛三条・岩倉御書付、伊丹・尾崎・桜井宛徳大寺実則御達
明治15年（1882）	7月	尾崎・桜井が京都に出張し、官家士族の先輩らを集め、第百五十三銀行設立を計画し、また、大宮御所の建物を玄武町に移築し、産業誘導社規則を定めて、産業誘導社を設立する。役員事務取扱方之事、金銭出納規則を取り決め、誘導社役員を定める。産業誘導社設立について、京都府知事横村正直へ特別保護を内願する。恩貸金の元金には手を付けず、利子によって営業することを、宮内卿徳大寺へ願ひ出る。	産業誘導社規則、役員事務取扱方之事、金銭出納規則、横村宛尾崎・桜井願書、徳大寺宛伊丹・尾崎・桜井願書
	(12月)	桂正芳を頭取として、第百五十三銀行を設立する。	
	1月	産業誘導社中で事業展開を望む者より、京都府知事北垣国道を通じて恩貸金3万円の元本支出の要求がなされ、これを認めたところ1万円を損失する。そのため残る2万円により学校を設立し、京都官家士族の子弟を教育する方針に転換する。学校設立について、三条・岩倉に請願書を提出する。	三条・岩倉宛伊丹・尾崎・桜井請願書
明治16年（1883）	7月	岩倉が死去する。	
	10月2日	京都官家士族のための学校設立について、15年間、年2千4百円の恩賜と、旧二条邸の拝借の内決が、三条より尾崎に伝えられる。	尾崎宛三条書簡
	10月8日	尾崎が宮内大輔杉孫七郎を訪問し、年限について15年の例なく10年とすること、期限を向かえれば継続願書の提出で差し支えないことを言い渡される。宮内省より、常磐井殿町の旧二条邸貸渡と、10年間、年2千4百円の恩賜が通達される。有栖川宮熾仁・三条より、京都官家士族の教育への尽力を命じられる。	伊丹・尾崎・桜井宛宮内省御達書、伊丹・尾崎・桜井宛有栖川宮・三条御書付
	(10月-)	山名茂淳・多村知興・中川武俊・泉亭俊彦・東辻清光が、平安義校創立委員となる。平安義校規則を定め、産業誘導社を廃止し、玄武町の建物を平安義校へ引き渡して、校舎・講堂・演武場・寄宿舎等に充てる。平安義校の資金は、恩貸金の残り2万円で買入れた日本鉄道会社の株式の配当金、年2千4百円の恩賜金、有栖川宮・三条・伊丹・尾崎・桜井からの寄附などを充てる。毎月平安義校の状況と学資の計算を、東京発起人に報告する義務を負う義校理事に、山名・多村・中川が就任する。その後、山名・多村は理事を辞任し、会計監督を辻重義に囑託する。義校の元金や恩賜金等は東京発起人が管理し、年4回義校に送付する。義校の教員等は、官家士族の関係者からわずかな報酬で雇う。貸渡した旧二条邸について、少々模様替や修繕を加えてもよいか、徳大寺に伺う。	平安義校規則、徳大寺宛伊丹・尾崎・桜井伺書
	11月22日	旧二条邸について、建物・庭園木石等の模様替は認められないが、仮建物の模様替や増築は差し支えないと、杉より回答される。	杉回答書
明治17年（1884）	1月	平安義校設立の際、有栖川宮・三条の訓諭の主旨をもとに、建校大意を官家士族一般に発布する。建校大意の要旨は、国書をもって国体を、儒学をもって義理を追究し、官家士族を神州の臣民として教育薫陶することである（明治23年の教育勅語の精神に通じることを、後年誇りとしている）。	建校大意
(明治19年(1886))		第百五十三国立銀行を、辻を頭取とする第百十一国立銀行に合併する。	
明治21年（1888）	6月12日	京都官家士族授産の恩貸金3万円を恩賜金とする旨と、三条・五辻を恩賜金取り扱いの監督とする旨が、宮内大臣土方元より通達される。土方が三条・五辻に恩賜金取り扱いを監督するよう通達する。	伊丹・尾崎・桜井宛土方御達書、伊丹・尾崎・桜井宛土方心得書、三条・五辻宛土方御達書
	12月31日	教育費基金現在所有高について、32792円73銭3厘である旨を調査する（平安抄紙場廃業および第百十一国立銀行破綻による損失〈6302円24銭4厘〉の費目については、後年△印を付している）。	教育費基金現在所有高

年	月日	事項	掲載史料（写し）
明治22年（1889）	3月27日	恩賜金取り扱いについて、規約を定め、現現金高を示し、京都の新聞紙面で官家士族に報告する旨、伊丹・尾崎・桜井が土方に上申する。恩賜金取り扱いについて、官家士族に報告し、恩賜金精算明細書は平安義校にて閲覧可能とする。在京都旧官家士族教育基金取扱規約を定める。	土方宛伊丹・尾崎・桜井上申書、在京都旧官家士族諸君へ伊丹・尾崎・桜井より報告、在京都旧官家士族教育基金取扱規約
明治24年（1891）	5月	平安義会が組織される。	
明治26年（1893）	3月	年2千4百円の恩賜金について、土方に継続願を提出する。結果として、10年間、従来半額となる年1千2百円の恩賜金が承認される。	土方宛伊丹・尾崎・桜井願書
	4月4日	五辻の恩賜金取り扱い監督の任を解く旨、土方より通達される。三条もすでに死去していたため、恩賜金の管理は伊丹・尾崎・桜井に帰することとなる。	伊丹・尾崎・桜井宛土方心得書
	7月	伊丹が平安義会会長となり、恩賜金の管理を引き継ぐ。	
	9月13日	10年間、年1千2百円の恩賜金について、宮内省より通達される。	伊丹宛宮内省御達書
明治26-29年（1893-96）		不十分な教員を雇わざるを得なくなったことに加え、恩賜金が半額となったことで平安義校の維持が困難となる。平安義校を廃止し、恩賜金により官家士族子弟のうち優秀で資力のない者に学資を貸与する方針を定め、これを宮内大臣に上申する。平安義校廃止については、平安義会の総会にて決するが、京都在住官家士族学資貸与規則の原案については、生徒の優劣や貧富を査定することに対して反対意見が出されたため、平等主義を採用し、現今の規則を定めることとなる。	宮内大臣宛上申書、京都在住官家士族学資貸与規則（原案）
明治30年（1897）	1月9日	帝室資産より4万円を下賜する旨が宮内省より、年1千2百円の恩賜金を明治29年で廃止する旨が内事課長より、それぞれ通達される。	伊丹宛宮内省御達書、平安義会会長宛内事課長御通牒
（明治31年（1898））		第百十一国立銀行が経営破綻する。	
明治33年（1900）	7月	伊丹の死去により、尾崎が会長となる。平安義会の財産を引き継ぐ。	引継財産目録
明治35年（1902）		軍事公債と東京市公債を売却し、郵船会社株式を購入する。	
明治40年（1907）	1月	明治26年の貸給費規則施行以来、貸給を受けて帝国大学・高等学校・私立専門学校等を卒業した者を調査する（58名）。	
	10月	在学中の者を調査する（貸費生39名、給費生308名）。	
	11月10日	平安義会の財産を調査する。	平安義会財産目録
明治41年（1908）	11月	『平安義会事歴』を編集・刊行する。	

のまま引用して書いた箇所がいくつか存在する。また、『平安義会事歴』では、全文が引用されている「平安義校規則」「建校大意」「在京都旧官家士族教育基金取扱規約」「官家士族学資貸与規則」などが、『尾崎三良自叙略伝』では、すべて「平安義校規則」「建校大意」「在京都旧官家士族教育基金取扱規約」「官家士族学資貸与規則」は「之を略す」とわざわざ記されていることから、こうした部分に関する限り、尾崎が『平安義会事歴』を参照しながら、『尾崎三良自叙略伝』をまとめたことがうかがえる。

つまり、『平安義会事歴』は、尾崎の手元にあった旧書類などをもとに編纂されたものであり、だからこそ尾崎は後年『尾崎三良自叙略伝』を叙述する際に、『平安義会事歴』をそのまま引用・参照したと考えられる。

『平安義会事歴』が編纂・刊行された明治四十一年における平安義会会長は尾崎であり、京都府立京都学・歴史館所蔵の『平安義会事歴』の表紙には、「会長尾崎殿ヨリ会員諸君へ送与」と墨書されていることから、『平安義会事歴』の主たる編纂者が尾崎自身であることは疑いない。『平安義会事歴』は、明治三十三年（一九〇〇）に会長に就任した尾崎の主導で編纂がなされ、明治四十二年（一九〇九）の平安義会の社団法人化に向けて、明治四十年（一九〇七）に実施された貸給費生調査や財産調査の結果も踏まえながら、明治四十一年十一月に刊行された史料なのである。

なお、明治二十一年（一八八八）頃から表面化してきた平安義校の教育・運営方針や恩賜金の使途をめぐる官家士族内部の対立、特に恩

賜金を管理する東京在住の尾崎らと京都在住の官家士族とのやり取りの詳細などについて、尾崎は『尾崎三良日記』に多くを書き留めているにもかかわらず、『平安義会事歴』ではあえてこうした事項にほとんど触れていない。また、『尾崎三良日記』や『尾崎三良自叙略伝』ではっきり書かれていない平安義会の設立時期について、『平安義会事歴』では明治二十四年（一八九一）五月と明記されている。『平安義会事歴』の編纂目的を考えれば当然のことではあるが、ここでは明治二十二年（一八八九）の京都旧官家士族教育基金取扱規約の制定から明治二十四年の平安義会設立、さらには明治二十六年の京都在住官家士族学資貸与規則の制定からその後の平安義校廃止に至る経過が、首尾よく進展したかのように描かれているのである。

ただ、京都在住官家士族学資貸与規則制定についてだけは、これが議題として諮られた平安義会の総会で、当初案では官家士族子弟の優秀で資力のない者に学資を貸与するという方針であったものが、これに反対する意見に耳を傾けて、すべての官家士族子弟に平等に学資を貸与する方針に変更の上、規則の決議がなされたとの詳細が、『平安義会事歴』ではわざわざ補足されている。

三 『平安義会資料』所収「平安義会沿革概略」の翻刻と解題

（一）『平安義会資料』所収「由緒沿革誌」について

『平安義会資料』には、「由緒沿革誌」と題された綴が十一冊（其ノ一―其ノ十二まで番号が付されているが、其十一を欠いている）所収

されている。これらは明治十六年から昭和十年までの関係書類を、副題に示された項目ごとに分類の上、綴込んで簿冊としたものである。以下に各冊の情報を整理しておく。

- 其ノ一 (副題なし) (明治十三年) ～昭和三年
- 其ノ二 社団法人設立ニ関スル書類 授産所ニ関スル書類 明治二十二年～四十一年
- 其ノ三 不動産売買貸借関係書類 課税免除願ニ関スル書類 明治二十六年～四十四年
- 其ノ四 平安義校ニ関スル書類 明治十六年～三十五年
- 其ノ五 宣誓式ニ関スル書類 明治三十四年～三十七年
- 其ノ六 本会敷地払下ニ関スル書類 明治三十九年～大正二年
- 其ノ七 御大葬ニ関スル書類 大正元年～三年
- 其ノ八 御大礼並ニ衣紋ニ関スル書類 大正四年～昭和三年
- 其ノ九 増改築ニ関スル書類 大正四年～昭和五年
- 其ノ十 同志社土地売買貸借関係書類 明治四十四年～昭和十年
- 其ノ十二 (副題なし) 明治二十九年～大正十年

さて、副題のない「由緒沿革誌 其ノ一」には、綴られている書類の目録が冒頭に付されており、「壹」から「壹貳」にナンバリングされた各書類の名称が列記されている。このうち「壹」として初めに綴られている書類は、「沿革ノ概略」と名付けられているが、これは「平安義会沿革概略」「記」「本会育英事業ニ関スル概略」「成績」という、異な

る時期に作成された四つの書類で構成されている。

今回はこれら四つのうち最初に綴られた「平安義会沿革概略」を翻刻・紹介するとともに、平安義会のあゆみについて、『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』や『平安義会事歴』と叙述の異なる点を中心に検討し、「平安義会沿革概略」の史料性格についても触れておきたい。なお、翻刻に当たっては、原則として旧字を新字に改めている。

(二)「平安義会沿革概略」の翻刻

(表紙)

平安義会沿革概略

「

平安義会濫觴及沿革

- 一 維新前ニ在リテハ、皇室御制度中学習院ノ設ケアリテ、講筵ノ定日ニハ、公卿地下官人御使番等参席ノ御規定アリ、
- 一 維新ノ改革ニ伴ヒ学習院ヲ廢シ、大ヒニ規模ヲ拡張セラレ、皇漢ニ学所ヲ開筵シ、宮堂上地下官人御使番並ニ其子弟ニ至ル迄、就学ノ道ヲ開カレシモ、明治三年御遷都ト共ニ右ニ学筵モ亦廢サレタリ、
- 一 茲ニ於テ明治十三、四年ノ比、京都出身ノ先輩者タル男爵伊丹重賢、男爵尾崎三良、桜井能監ノ三氏発起トナリ、旧官家士族中有志ノ輩ヲ糾合シ討議ノ末、同族中ヨリ資金ヲ醸集シ、明治十六年十月

上京区今出川玄武町ノ地所ヲ買得シ、学校ヲ設立シ之レヲ平安義校ト名称シ、同族子弟ノ教育ヲ開始セリ、右創設ニ際シ其挙ヲ賛成セラレ、皇族方ヨリ各金品書類等ノ寄贈アリ、

右ノ趣朝聞ニ達スルヤ、畏クモ御内帑ヨリ年々金貳千四百円、皇太后宮、皇后宮、兩陛下御手元ヨリ一時金若干円、旧皇后内御不用ノ御建物等下賜ノ御命アリ、尚上京区今出川常磐井殿町御用邸ノ地所建造物共貸下ノ御沙汰アリ、当時充用ノ本会々議所是ナリ、次テ

天皇皇后兩陛下ノ御震影^(ママ)下賜セラル、依テ恒例トシテ三大節ニハ賜邸広間ニ於テ、会員一同奉拝ノ式ヲ举行セリ、

一 是ヨリ曩、明治十二年旧官家士族授産資金トシテ金參万円ノ恩貸アリテ、授産誘導社ト名クル一工社ヲ設立シ、同族授産ノ道ヲ講セシモ、素ヨリ不慣ノ事業ナレバ、其成功ノ覺束ナキヲ顧慮シ、内奏ノ上其事業ヲ廃止シ、其利金ハ平安義校ノ学資ニ充用シアリシガ、明治二十一年六月ニ至リ更メテ教育元資トシテ下賜の御沙汰アリ、

一 同廿三年三月御貸下ノ御用邸建造物ノ全部ヲ、旧官家士族団体へ下賜セラレ、同敷地ハ従前ノ通、貸与スベキ旨御沙汰アリ、
一 同廿四年五月内務省ノ達シニ基ケル士族授産金ノ整理ニ付、壹千有余円ノ下付アリ、右ハ当地在住ノ士族（旧藩士族ヲ除ク）即チ旧官家士族、杜士族、旧幕臣士族等ノ收受スベキ者ナルヲ以テ、一時修好会ト名クル団体ヲ組織シ、受領ノ后、旧幕士族ハ之レヲ分与シ、他ハ旧官家士族名儀^(ママ)ノ下ニ、一括シテ平安義会ト改称セ

リ、

一 同廿六年七月旧官家士族団体ノ所有ニ関スル平安義校並ニ資金ノ全部ヲ、当時ノ管理者ヨリ平安義会引継ヲ了セリ、然ルニ世運ノ進化ニ伴ヒ、益教育事業ノ発展ヲ促ガシ、各専門ノ学校モ漸次増設セラルニ方リ、僅カニ中等教育程度ノ一学校ヲ擁シ、多数会員子弟ノ学修ヲ完成セシムルコトハ、到底不可能ナルヲ以テ、宮内省へ届出ノ上、平安義校ヲ廃シ学資補給ノ制ヲ創設セリ、其方法タル普通教育ニ在リテハ約授業料ニ等シキ金額ヲ給与シ、高等専門学校以上ニ在リテハ其程度ニ従ヒ、各差等ヲ設ケ其学資ノ二分一乃至三分一ヲ貸与シ、有望ノ子弟ヲ奨励シテ国内各地ノ官公立ナル各種学校ニ就学セシムルノ便ヲ与ヘ、益人才ヲ養成スルノ方針ヲ取り、漸次規則ノ改善ト其区域ノ拡張ヲ勉メツ、其業務ヲ持續シテ現今ニ至レリ、

一 同廿六年九月平安義校年賜金ノ義ハ年限満了ニ付、継続願書差出候処、尚向フ十ヶ年間年々金千貳百円下賜ノ旨、御沙汰アリ、

一 同年十月平安義校へ下賜ノ年金ハ、示来平安義会へ下賜相成ルベキ御沙汰アリ、

一 同廿九年ニ至リ、子弟ノ数漸次増加シ、諸物価騰貴ト共ニ、学資増額ノ必要ニ迫リタルヲ以テ、右事情ヲ具シ、元資^{下賜}。増額ノ儀歎願セシニ、同三十一年一月左ノ御沙汰ヲ蒙レリ、

平安義会々長

正三位男爵伊丹重賢

今般

特旨ヲ以テ旧官家士族子弟教育資トシテ、帝室資産ノ内軍事公債証書額面四万円下賜候條、其基礎ヲ鞏固ニシ、子弟教養ノ実績ヲ顕揚スベシ、

明治三十一年一月九日

宮内省

今般旧官家士族子弟教育資トシテ、金四万円特賜相成候ニ付テハ、従来下賜ノ年金千弍百円ハ、昨廿九年限り被停候條、此段及御通牒候也、

明治三十一年一月九日

内事課長

右御沙汰ニ依り本会ハ謹テ、

皇恩ノ優渥ナルヲ感佩シ、子弟教養上厚ク

聖旨ヲ拝戴シ、専ラ薰育涵養ノ実績ヲ顕揚セン事ヲ勉メ、益基礎ヲ鞏固ナラシメンタメ、茲ニ總會ノ決議ヲ以テ、法人組織ニ変更セン
トス、

（三）「平安義会沿革概略」の解題

「平安義会沿革概略」における平安義会のあゆみの叙述方法について、まずはその特徴を考察していく。

「平安義会沿革概略」では、維新以前の学習院の存在、維新による学所の開設といった地下官人らを取り巻く従前の教育環境から書き始め、東京遷都による学所の廃止に続けて、明治十六年（一八八三）の平安義校設立に触れている。また、明治十二年（一八七九）の三万円

の恩貸金と産業誘導社設立については、これより後でわずかに補足するにとどまり、誘導社廃止に伴いその資金が平安義校の学資に充用されたことや、明治二十一年（一八八八）に恩貸金が恩賜金とされたのは教育原資とするためであったことを、むしろ強調しているのである。さらに、平安義校廃止と学資補給への方針転換の理由については、専門の学校が充実していく社会情勢の中で、平安義校一校において官家士族子弟の教育を完成させるのは困難なためと説明されている。

以上は『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』や『平安義会事歴』における平安義会のあゆみの叙述方法と、明らかに異なっている。「平安義会沿革概略」は、平安義会がその設立以前より一貫して官家士族子弟の教育を支援するための団体であったとの印象を、意図的に強調しているようである。

つぎに「平安義会沿革概略」の中から、『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』や『平安義会事歴』では書かれていない事項を取り上げている。

「平安義会沿革概略」では、平安義校について、伊丹重賢・尾崎三良・桜井能監が官家士族より資金を集め、玄武町の土地を買取って設立したものとする。その上でこれに賛意を示した皇族方より、年二千四百円の恩賜金だけでなく、さまざまな金品・書類や、不用の建物・御真影などの下賜がなされたとしている。また、明治十六年より貸下されていた旧二条邸について、敷地は従前のとおり貸与のまま、明治二十三年（一八九〇）にすべての建造物が下賜されたとある。さらに、『平安義会事歴』では平安義会の設立年月とされている明治

二十四年（一八九一）五月、内務省の士族授産金整理によって、京都在住の士族（官家士族・寺社士族・幕臣士族）に千余円の下付があり、一時的に修好会という団体を組織してこれを受け取った後、幕臣士族にはこれを分与し、寺社士族を含む官家士族が修好会を改称して、平安義会を組織したという。

以上のように、平安義校や平安義会の設立といった重要事項について、『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』および『平安義会事歴』と異なる叙述や詳細な説明が、『平安義会沿革概略』ではなされているのである。いずれの記載が事実であるかについては、ここで結論を出すことを控えるが、引き続き『平安義会資料』および『旧桜橋財団関係資料』に所収されているさまざまな史料を検討することによって、こうした課題の克服が可能になると考えている。

さて、『平安義会沿革概略』の最後は、明治三十一年（一八九八）一月における四万円の下賜と年千二百円の恩賜金廃止の通達を掲載した上で、こうした皇恩に感謝し子弟の教育涵養の基礎を固めるために、平安義会の法人組織化を目指す総会決議がなされたと結んでいる。なお、『尾崎三良自叙略伝』や『平安義会事歴』では、四万円下賜等の年月を、明治三十年（一八九七）一月とする。

平安義会が社団法人として承認されるのは、明治四十二年（一九〇九）六月であるが、『尾崎三良日記』の明治三十三年（一九〇〇）十二月一二日条で、平安義会を法人化するための定款等の存在が確認でき、明治三十年からあまり遠くない時期には、すでに法人組織化が模索されていたようである。『平安義会沿革概略』は、平安義会が法人

組織化を目指す中で、その必要性から京都在住官家士族のしかるべき立場の人物によって、作成された書類ではなからうか。

おわりに

本論では平安義会や京都桜橋財団と官家士族に関する研究史を整理・紹介した上で、先行研究が依拠した史料である『尾崎三良日記』『尾崎三良自叙略伝』および『平安義会事歴』を再検討することにより、平安義会および京都桜橋財団について、これまで言及されてこなかったいくつかの事実を確認した。

また、『平安義会事歴』が二代目会長の尾崎三良を中心に、彼の手元にあった書簡・請願書などの書類に基づいて編纂されたこと、『尾崎三良自叙略伝』には『平安義会事歴』を引用・参照した箇所が見出されることを指摘した。つまり、先行研究が明らかにしてきた平安義会のあゆみについては、ほとんど尾崎の視点で書き残された史料ばかりを根拠としているのである。

これに対して、本稿で翻刻・紹介した「平安義会沿革概略」は、おそらく京都在住の官家士族によって作成された史料と考えられ、尾崎とは異なる視点から平安義会のあゆみを描いている。『平安義会資料』および『旧桜橋財団関係資料』に所収されている史料には、尾崎周辺だけでなく、さまざまな立場の人物によって作成された書類が、他にも多数含まれる。これらを検討することによって、平安義校の教育・運営方針や恩賜金の使途をめぐる官家士族内部の対立、また、平安義

会の設立から学資貸与規則の制定と平安義校の廃止に至る経過、加えて平安義会の社団法人化や京都桜橋財団の設立の目的・経緯、および両団体の関係性などについても、解明できるものと思われる。

さらに、『平安義会資料』および『旧桜橋財団関係資料』には、明治期から昭和四十年代までの史料が所収されており、大正期から昭和戦前期における平安義会と京都桜橋財団の事業内容や、それらが官家士族に果たした役割、また、戦後における両団体の変質過程など、これまでの研究ではほとんど触れられることのなかった時期の動向についても、これらの史料によって追究が可能となろう。

本稿では「平安義会沿革概略」の翻刻・紹介のみにとどまったが、次稿以降においては、『平安義会資料』所収「由緒沿革誌」の項目分類を基礎として、毎回ある程度まとまったテーマ（たとえば「平安義会の社団法人化」「平安義会への授産金引継」など）を設定し、『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の翻刻・紹介だけでなく、『若杉家文書』『下橋家資料』をはじめとする官家士族諸氏に伝わった両団体関係書類や、『京都日出新聞』といった新聞資料の関連記事なども適宜参照しながら、テーマごとに存在する課題を一つひとつ解明していきたい。

注

(1) これらの資料の目録は、京都府立京都学・歴史館の「京の記憶アーカイブ」(<http://www.archives.kyoto.jp/>)によって検索・閲覧することができる。

(2) 小林丈広『明治維新と京都—公家社会の解体—』（臨川書店、

一九九八年）。

(3) 伊藤隆・尾崎春盛編『尾崎三良日記 上・中・下巻』（中央公論社、一九九一—一九九二年）。

(4) 『尾崎三良自叙略伝 上・中・下巻』（中央公論社、一九七六—七七年）。

(5) 陰陽頭土御門家の家司であった若杉家に伝えられた二二八五点の文書。京都府立京都学・歴史館所蔵。

(6) 山下奈津美「平安義会のあゆみ—二條家と同志社をつなぐもの—」（『同志社大学歴史資料館館報』一一、二〇〇八年）。

(7) 『平安義会事歴 全』（平安義会、一九〇八年）。なお、同資料は表紙に非売品と記載されているが、現在、京都府立京都学・歴史館をはじめ、いくつかの図書館で所蔵されており、まれに古書店で取り引きされることもある。

(8) 松田敬之「明治・大正期 京都官家士族の動向に関する一考察—華族取立運動と復位請願運動を中心に—」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』六、二〇〇一年）。

(9) 『幕末の宮廷』は、大正十年（一九二一）七月、宮内省図書寮に下橋敬長を招聘して、維新前の宮廷に関する談話を速記させたもので、幕末の宮廷制度を知る上で欠かせない資料である。下橋敬長述・羽倉敬尚注『東洋文庫三五三 幕末の宮廷』（平凡社、一九七九年）。

(10) 一条家の侍・諸大夫であった下橋家に伝えられた一六四七点の資料。京都府立京都学・歴史館所蔵。

付記

本稿の執筆に当たっては、平安義会相談役の今原嘉麻呂氏に多大なるお力添えをいただいた。また、同会理事の松室幸雄氏・小栗栖元徳氏、会員の中根純夫氏にも大変お世話になった。なお、資料受け入れ直後にもかかわらず、閲覧等の際には、京都府立京都学・歴史館の辻真澄氏よりご支援を賜った。記して感謝申し上げたい。